

## 海運

2024年9月17日



# 博多港、国際物流総合展でセミナー 充実した航路網などPR



セミナーの様子

東京ビッグサイトで開催された「国際物流総合展2024」で12日、福岡市港湾空港局と博多港ふ頭が、博多港についてのプレゼンテーションセミナーを実施した。セミナーではアジアに近い地理的優位性を生かした豊富な航路網をPR。コンテナターミナル（CT）の概要やトライアル輸送の支援制度についても紹介し、同港のさらなる利用を呼び掛けた。

博多港には国際定期コンテナ航路として、44航路・月間220便が寄港している。RORO航路の貨物を除く昨年のコンテナ取扱量は約86万TEU。コロナ禍で一時減少したものの、長期的に見ると東南アジア発着の貨物などがシェアを伸ばしており、概ね増加傾向となっている。昨年12月には新潟港と結ぶ鈴与海運の日本海フィーダー航路も就航した。インターエイシアラインとコスコ SHIPPING ラインズが利用し、博多港で2社が運航する航路に接続している。現在、複数の台湾船社が利用を検討している状況だという。

このほか、博多港にはカメラリアラインによる釜山と結ぶフェリー航路や、近海郵船による敦賀港と結ぶRORO航路なども寄港しており、外内貿ともに充実したネットワークが強みだ。琉

球海運が運航する博多—那覇間を結ぶ週3便のRORO航路については、水曜寄港便が台湾の高雄まで向かうため、半導体装置関係の輸送で特に需要が高まっている。

また、継続して実施している「博多港コンテナ物流トライアル推進事業」も紹介した。同事業は荷主や物流事業者、日本海フィーダー利用事業者を対象に、博多港を利用したトライアル輸送に係る費用を1事業当たり最大100万円支援するもの。陸送からRORO船での輸送に切り替える際に補助金を利用した例などを紹介し、コストやCO2排出量削減につながったとした。

博多港ふ頭からは同港の2つのCTについて説明があった。香椎パークポートCTの蔵置能力は8013TEU。昨年3月にヤード拡張部の供用を開始したアイランドシティCTは2万8128TEU。リーファープラグ数は2つのCTを合わせて908TEUと九州域内最多の数を誇る。CT管理システム「KACCS」や独自の物流ITシステム「HiTS」も提供しており、取扱量が増える中でもゲート混雑が発生しないよう取り組みを続けているとした。

Daily Cargoに掲載の記事・写真等の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

© Kaiji Press Co., Ltd. All rights reserved.

No reproduction or republication without written permission.

## 【国際物流総合展】

# 博多港、フィーダー就航PR。環境負荷低減の成果も紹介

福岡市と博多港ふ頭は12日、東京ビッグサイト（東京都江東区）で開かれた「国際物流総合展2024」で、フィーダー航路就航やターミナル整備といった近年の動きに関する講演を行った。環境負荷低減の取り組みを通して、CO2（二酸化炭素）排出量を削減したことも紹介した。

福岡市は講演で、博多港に昨年12月に就航した鈴与海運の日本海側フィーダー航路について言及。「ドライバー不足や災害リスクなどに関する意識が高まったことが就航につながった」と話した。近年の同港の動きとして、アイランドシティコンテナターミナルで2023年3月にDコンテナターミナルが供用開始したことも紹介。今後の貨物増への対応力をアピールした。

また、博多港を利用したトライアル輸送を支援するインセンティブ制度について活用事例を説明。北海道から九州への食品輸送の事例では、陸送による一貫輸送、陸送とRORO船を組み合わせた輸送からRORO船を乗り継ぐ形態に切り替えたところ、CO2排出量を約6割削減した。

博多港ふ頭は、ターミナルの環境負荷低減の取り組みについて発表。ストラドルキャリアのハイブリッド化、RTG（タイヤ式トランスファークレーン）の電動化、リーファーコンテナに日よけの屋根を設置するなどしてきた。取り組み前の09年と23年とを比較すると、1TEU当たりのCO2排出量は13キログラムから約8・6キログラムに減少する成果があった。

新たな取り組みとして、トレーラーでのバイオ燃料活用の実証実験や環境配慮型船舶に対する入港料のインセンティブ制度を導入したことを紹介した。



フィーダー航路就航やターミナル整備など近年の動きに関する講演を行った